

	<h1>みずみどり</h1>
<p>2004年3月15日 第41号</p>	
<p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p>	
<p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会</p>	
<p>http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/</p>	
<p>E-mail : mizumidori@nifty.com</p>	
<p>〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>	

さくらのはなし

3月の声を聞くと、今年は桜がいつ開花するのか・・・との思いが自然にわいてきますね。区内でも梅祭りに続いて、桜のある公園では事前に赤いぼんぼりをつり下げ桜祭りが開かれます。

桜の開花はその年の早春の気候(平均気温)に左右され、昨年は3月に暖かい日が多くて開花が急に早まり、ぼんぼりの準備に大童だったようです。今年も暖冬気味なので、早く咲くのかもかもしれませんね。退職後はお花見で夜を過ごすこともなくなりましたが、散歩がてらに花を見に行くのを楽しみにしています。



桜といえばソメイヨシノ(染井吉野)が最も多く植栽されていますが、全国いや全世界のソメイヨシノは殆どクローンどころか、同じ一本の木なんだそうです。エドヒガンザクラとオオシマザクラ(山桜)の雑種で、東京の巣鴨近くの染井で生まれ「ヨシノザクラ」の名で売り出されたが、吉野山の桜と区別するためソメイヨシノに変えられたとか。ソメイヨシノには殆ど実がなりませんから、増やすのは山桜など台木に接木しています。桜の古木には根元にたくさんヒコバエが生えますが、これはみんな台木と同じ木(多分山桜)です。

山桜にも花の色や大きさなどが異なる多くの種類があるが、花と一緒に葉が出るのが特徴です。また、実がよく成ることも特徴のひとつで、ソメイヨシノのほか八重桜(サトザクラ)などを増やすときの台木として、実生苗がよく利用されることとなります。実が成ることから交雑し、ソメイヨシノに近い(花が咲く)木もあるのではないのでしょうか。

高島平2中と2小に隣り合って咲く桜の木は毎年たくさん濃紫の実がなり、ヒヨドリなどの野鳥

が花時に続いて集まってきます。花はソメイヨシノに似ていますが葉の出が早いことから、多分山桜の仲間なのでしょう。赤塚公園の大門地区に植えられている何本かの山桜は、花が薄い紅色のうえ若葉が紅色で、花時にはあでやかさをいっそう引き立えています。

国内で名所のひとつ吉野山の桜も山桜で、花や若葉の色が豊富で見事です。また、山桜(オオシマザクラ)の葉は桜餅に使われ、伊豆半島で大半が生産されていることも知られています。ちょうど桑畑のように整然と植えられた桜の木を、地際で刈りとって毎年元気なシュートを出させ、柔らかい大きな葉を摘み取って塩漬けにしたものが出荷されています。

桜の仲間は東アジアに30種類ほどあるとか、国内では北海道から沖縄まで、かなり高地にも自生の桜があり、沖縄では早く(1月に)深紅で下向きに、半開の花が咲くヒカンザクラ(カンヒザクラ:寒緋桜)が有名です。高島平の赤塚公園事務所近くに2本ありましたが、樹勢が弱く周りのソメイヨシノに圧倒されていましたが、去年までになくなりました。各地に少数ですが植えられており、身近なところでは、赤塚体育館近くの上谷津公に一本植えてあり、上野の動物園前に一本植えられていたのを記憶しています。

山形県の名産サクランボや近年輸入されている実の大きい洋種のサクランボもサクラの仲間(実桜)ですね。

桜を食べるのは人間だけでなく、実を好む野鳥の他、木そのものを食う各種キクイムシやカミキリムシ、葉を食うものでは蓑虫や外国渡来のアメリカシロヒトリや声のやかましいアオマツムシなどがいるようです。樹液を吸う各種アブラムシやカイガラムシもサクラが好きなようです(詳しいことは釣巻さんに譲ります)。

桜の木はやや硬いが均質で加工しやすく、木肌に光沢があるので建築材や家具・楽器などに使われ、樹皮は強くて美しいので細工物に貼って使われたり、蒸籠など曲げ物の縫い合わせに桜の皮が使われています。桜は木屑(チップ)も燻製(食品)の燃料に珍重されていますね。

花の豪華さでは八重桜が優りますが、植えられている数は多くないですね。梅がポツポツほころびるのに比べ、桜はパッと咲いて一斉に散るところから、人の引き際の潔さにたとえられることもあります。なんとと言っても満開の桜を眺めると心が和み、日ごろの悩みも一瞬忘れさせてくれる(酒の助けと相俟って?)ので、各地の桜にたくさんの花見客が集いますね。さあ今年もサクラが咲いたら、花を愛でて明日の活力をもらいに出かけましょう!

[参考]6月に桜の実が熟したら拾って、果肉を洗い流してすぐに蒔き(発芽は次の春、乾燥させない)苗を育てると、鉢植えでも花が(接木をすると3~4年で)咲きます。写真の左側(紅色)はカンヒザクラ、右は実桜(サクランボ)で、どちらも山桜の台木に小生が接木したものです。

猪鼻昭二



赤塚トンボ池のヤゴの天敵駆除

コイの捕獲に成功

3月8日(日)赤塚トンボ池のコイの捕獲作業を行い、真ゴイ2匹と緋ゴイ1匹、平ブナ3匹、他に乗蓮寺下ピオトープの金魚1匹、合計7匹の魚を捕獲しました。体長53cmの真ゴイを頭にいずれ劣らぬ大物ばかりで、その堂々たる姿にはびっくりさせられました。

大形の魚はすべて捕獲できたと思いますが、カメ3匹?は、冬眠している池底が厚い堆積土に覆われていて探すことが出来ませんでした。

真田式捕獲術

厳寒のこの時期、浅く流れのないこの池の水温は零度近くまで下ってしまうため、コイの活動は鈍って、箱(浮舟)の下に隠れてじっとしている筈。湯水で逃場も狭いので、今なら簡単に捕えられる。そんな真田発案でコイ捕獲策戦は決ったようです。(1月度運営委員会)

捕獲作業は、植田さんと大西さんと私の3人が胴長を履いて池に入り、網の設置場所を作るため張りつめた氷を割ることから始った。つぎに、袋状の網(巾着網)を池の中心側から箱に向け、コイが逃げ込むように仕掛ける。さらに、箱の両横から逃げ出されないように袖状の網(刺網)で覆った。あとは、網のない橋側から追えば、逃げ出して、何処かの網に掛かるという寸法である。箱の下に棒を差込み一気に追いたて、コイの捕獲作業を開始した。



箱舟の下で越冬しているコイを追い出す

思わぬ抵抗に驚く

コイは想像以上に利口で警戒心の強い魚でした。逃げ惑い簡単に刺し網に掛ったフナとは違って、非常に用心深かった。網に少しでも体が触ると直ぐに逃げ戻ってしまうので、入れば最後と判っているかのようなのです。棒で何回も叩かれ小突かれても、箱の下を離れようとしない。コイの往生際の悪さに我々が往生させられた一幕でした。

「仕掛けは万端、結果を御覧じあれ」と防鳥ネットで作った私の苦心の作も、網の赤い糸が目立つのか、コイに警戒されてしまったのです。しかし、箱と網の間を逃げまどうところを、何とか掬って仕留めることが出来ました。まあ一良としましょう。

なお、ここでも真田式掬い網が威力を発揮したことを書き添えておきます。



捕獲したコイなど

ヤゴの天敵の天敵して貢献

コイは、困った来訪者、ヤゴの天敵と悪名ばかりが高かったが、ザリガニ駆除には大いに貢献していたのではないかと。捕われ川に追放されましたが、せめてもの餞けに、その検証をしてやりたいと思う。

前号、森レポートの捕獲実績や駆除作業を通して見たザリガニの生息状況は、01年での変化は小さく、02年を境にやや減り、03年後半にはかなり減っている。捕獲数の推移からも、1回の網に掛かる数の変化からもそう言えると思うのです。

無謀な推論と言われるかも知れませんが、01年の1000匹では減らなかったのに、02年の倍に満たない1800匹の捕獲で、凄いとされるザリガニの繁殖力にどうして抗し得たのか。それは、時を同じくして放流されたコイが一役買ってくれていたとすれば説明がつくのです。食べるのが、たとえ小さなザリガニだけとしても毎日何匹かを食べれば、年間では1万匹もが餌食になる。コイの放流を少しも是とする考えはないが、今回の効用だけは認め、今後のザリガニ駆除につなげたいと思うのです。

区民の理解に期待

公園を訪れたたくさんの人が立ち止まり、我々のコイの捕獲作業を見物していききました。どうして捕まえるのか不思議がって聞く方も多かったようです。ビオトープの目的を話し、なぜ池に生き物を放さしてはいけないのか、説明しました。

このような放流が、二度と繰り返されることのないことを期待してやまない。(飛田 順)

今年も梅まつりに参加しました

3月6日(土)と7日(日)に開催された板橋区主催の梅祭りは赤塚溜池公園で行われて水と緑の会は今年も参加しました。1日目も2日目も真冬に逆戻りしたような寒さの中、2日目は一時小雪も舞うほどでした。

1日目は朝9時から準備。事前に準備しておいた竹、昨年トンボ池まわりの伐採をしたときのアカメガシワなどを用意したり、のこぎり体験用の馬(台)を用意。

イベントが始まると、大勢の方が参加し、盛況でした。

水と緑の会は昨年と同じトンボ池前陣取りました。

会のPRコーナーでは赤塚の生き物を展示

バッタ広場で観察できるゴマダラチョウをパネルに展示をしました。パネルでは越冬前幼虫、春にエノキの若葉をもりもり食べて大きくなった幼虫、その後のさなぎ、羽化したゴマダラチョウなど成長の様子を展示しました。釣巻さんが制作した赤塚の森に住む掃除屋の虫たちの標本。糞を食べる



るコガネの仲間、動物の死体を食べるシデムシの仲間、枯れ木を食べるキマダラカミキリや、コクワガタ、ミミズやケムシを食べるアオオサムシ、枯葉を食べる蛾などなど。赤塚公園で死んでいたアズマモグラを会で剥製にしたもの。りっぱな台にのせられ、鼻と手にちょっと化粧してお目見えしました。

のこぎり体験コーナーでは

子供は初体験ののこぎりの使い方を、会のメンバーから手ほどきを受け、目を輝かせ、大人は何年ぶりののこぎり体験を楽しみ、列が切れることもなく、用意した木も竹もすべてなくなっていました。植田さんの今年大学生になる息子さんと友達の若い力も借りられました。若い人は良いですね。水と緑の会も若い人が入ってくると良いですね。



ペンダント作りのコーナーは

大変な人ばかりでした。のこぎりコーナーで切ったり、手伝って切ってもらったりした木に、用意したペンで絵を書き、その後、私たちが金具を付け、リボ



ンをつけてペンダントにしました。今年はリボンの色も6色用意してみました。ペンダント作りは今年で3年目ですが年々参加者が増えて今年は、用意した金具とリボンが足りなくて2日目に買い足し、また足りなくなって木に直接穴を開けた物も作ったりしました。

2日間で約400個のペンダントを作りました。一時は私たちの生産が追いつかず、子供と一緒にのお母さんに応援を頼んだり、大きい子には自分でリボンを結んでもらったりしました。

たくさんの親子が参加してのペンダント作りでは、親子の様子も様々で面白いと思いました。作品も皆それぞれに個性的でした。私は作っている時は気がつきませんでした。足が痛いのと寒いのとで家に帰ってからは疲れがどっと出ました。

トンボ池のヒキガエルの卵

子供たちはカエルの卵を知っている子が多かったように思います。何処で見たのか聞いてみると学校の池だそうです。学校の池は大切ですね。

学校の池も金魚やザリガニを入れずに自然池にすれば良いのになどと考えたりもしました。

寒くて忙しくて面白かった梅まつりでした。

瀬田政江

バッタ広場に生えてきた木(2)

鳥が運ぶ木(つづき)

鳥が種を運ぶ距離は短い。これはどの本にも書かれているので本当なのであろう。ところが最近読んだ本によると、大陸から遠く離れた小笠原などの孤島(もちろん過去に大陸と陸続きになったことが一度もない大洋島である)の植物は、意外なほど鳥散布のものが多くそうである。はるか遠くから鳥が種を持ってくる可能性もゼロではない、という事を頭の片隅に置いておこう。

どんぐりと柿のタネを運んだのは誰だ？

広場の北側に柿の木が一本生えてきた。栽培植物だから抜いてしまおう。いや、草原の端っこに柿の実がなっている景色も捨てがたい。どうも迷うところである。さてこの柿はどうしてここに生えてきたのだろうか。鳥が柿の種を飲み込む、という話は聞いたことがない。多分最近住みついたタヌキか人が張本人であろう。タヌキは美術館裏のやぶが本拠地になっているようだ。そこは溜糞場があるし、ケモノ道もはっきりついている。バッタ広場には溜糞場はみつからない。タヌキは溜糞場以外では糞をしないのならば、人間が真犯人であろう。

最近市街地にも進出したハクビシンも柿の種を運びそうだが、まだ赤塚公園にはいないようである。

ドングリも小さな鳥は運べない。運び屋はリスかノネズミか中大型の鳥が記録されている。広場に生えてきたのは数本のクヌギとコナラ、はたして運び屋は誰であろうか。

リス(ニホンリス)は現在、東京周辺の平野部では記録がない(千葉県船橋市では1980

年代の記録有り)。ノネズミ類は森林性が強いホンドアカネズミが考えられるが、板橋区では記録がない(白金の自然教育園にはいるらしい)。

鳥ではオナガ、カケス、キジバト、オシドリがあげられる(ヒヨドリが含まれている本もあるがどうなのであろうか)。オシドリは明らかに赤塚公園にはいないし、オナガ、キジバトは本当にくちばしにドングリをはさんで飛んだりするのか、私は知らない。残るのはドングリを貯食する習性を持つカケスである。30年以上前の赤塚の雑木林では、カケスはよく見かける鳥だった。ところが最近ではかなりめずらしい鳥になってしまったようだ。私自身の最近の目撃例は今年1回と、3年ぐらい前にタケの割れ目から押し込まれていた数粒のドングリを見たぐらいである。もっとも私は鳥に関しては、昆虫ほど熱心に見てはいないので本当のところは分からないが、昔に較べればはるかに少ないのは確実である。

一方、運ばれるドングリのなる木でこの近くにあるのは、クヌギ、コナラ、シラカシ、アカガシ、アラカシである。このうちアカガシ、アラカシはごく少なく、私の知るかぎりでは1から数本しかない。多いのは広場を取り巻くように生えているのはクヌギとコナラで、シラカシは少し離れたところに多く、斜面の下には大木もある。

広場に生えてきたのは隣に生えているクヌギとコナラで、シラカシは見つからなかった。運び屋の動物も現在はあまりいない。以上を総合するとドングリは木の下にただ落ちるだけで、風が強ければ数メートル吹き飛ばされるし、子供が投げ込んだものかもしれないし、といったところであろう。

ドングリと同様の重力散布の典型はエゴノキである。広場北側の母樹の下以外では見つからなかった。エゴノキの果実はサポニンを含むが、種子はヤマガラなどがよく食べるそうであるが、少なくともバツタ広場では種子散布に鳥は関わっていない。(釣巻岳人)

総会に向けて

今回お送りする会報3月号で41号になります。会ができたのが1997年4月。7年間続いたことになります。赤塚でトンボ池をつくる機会に恵まれ、バツタ広場の提案が受け入れられて活動が現実的になりました。が手を加えることの難しさも経験しました。

規約には、「板橋区および周辺地域の残る自然を保全し、本来の姿を回復するとともに後世に伝えていくこと」を目的にかかげた、「公共の目的」のために集まったボランティア。自然を保全することに全員異論はないのですが、その「自然」や「保全」の内容について具体的な場面ですれ違いも結構多いように思います。また赤塚トンボ池は14年度までは環境保全課と一緒に管理してきましたが、15年度から会にまかせっきり。現場をしっかりと見て、勉強もして、私達も満足できるような活動を模索しましょう。では総会で会いましょう。

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

4月運営委員会 日時： 4月2日(金) 18:30~20:30

5月運営委員会 日時： 5月7日(金) 18:30~20:30

いずれもエコポリスセンターです。

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方は応援よろしく

日時：5月18日(火) 17:30~ 場所：エコポリスセンター

活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)

毎月第4土曜日が定例の活動日です。この日は、赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に午前中は自然観察とゴミ拾い。必要な修理等があれば午後行います。観察会は原則として雨天も実施します。

3月の活動 「落葉だめ1号」作り直しと土のなかの生物調査

日時：3月27日(土) 10:00~12:00 場所：美術館前トンボ池

持ち物：軍手、ルーペ(あれば)

もしかしてカブトムシがすむのではと期待した「落葉だめ1号」ですが、翌年も3年後も幼虫らしいものも見当たらずそのままになっていたら、1月に壊されてしまいました。落ち葉を赤塚公園の土に戻す場所なので、作り直すことに。

4月の活動 「赤塚公園ウォッチング」

日時：4月24日(土) 10:00~12:00

場所：赤塚5丁目集会所

内容：見つけた自然、大事にしたいところ、好きなところ、気になるところなどをみんなに伝え、聞きながら、ウォッチングします。

四季のおくりもの=植物画=

日時：3月16日(火)~21日(日)

場所：赤塚植物園講習室

篠原先生が、植物のひとつ、ひとつとつきあって描かれた作品展です。

みなさんに配った植物調査シートは観察会の度に活用します。

篠原先生が赤塚周辺の植物調査記録をもとに作成。アイウエオ順にならんでいるリストにつける方法で記録も集計も容易。1年間とおして観察した種をみんなで記録しましょう。